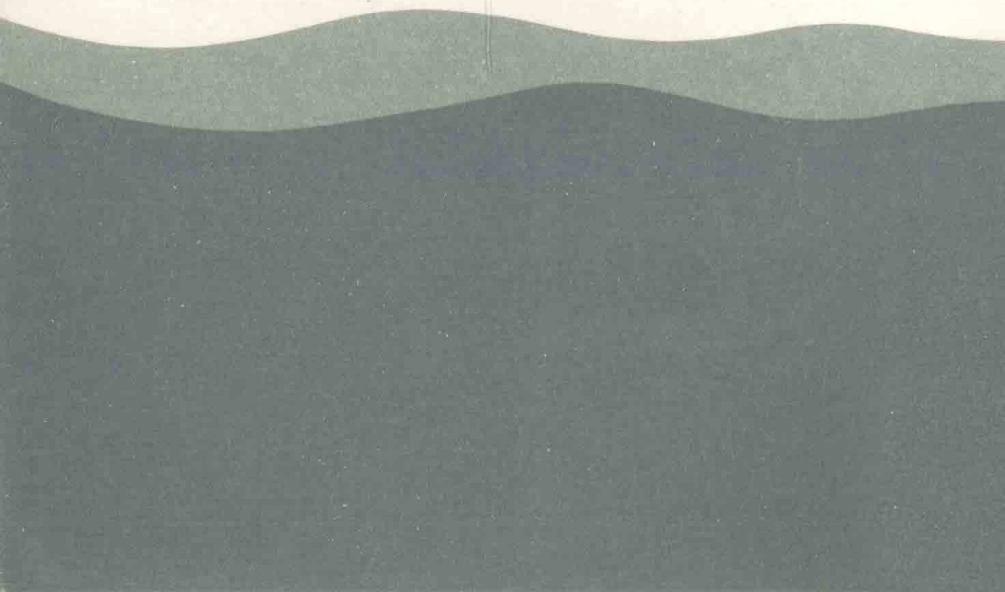


山田太一

藍より青く 上



山田太一

藍どり青く
上



中央公論社

山田太一（やまだ・たいち）

昭和9年，東京浅草に生まれる。
早稲田大学卒業後，松竹大船撮影所演出部を経て，現在，フリー・シナリオライター。
主なシナリオに「パンとあこがれ」「3人家族」
「二人の世界」「知らない同志」他。脚色に「女
と刀」「俄」などがある。

藍より青く

定価四八〇円

昭和四十七年八月一日初版
昭和四十七年九月二十日五版

著者 山田太一

発行者 山越 豊

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一

振替東京三四
〇一九七二 検印廃止

目次

昭和十八年 早春	6
恋	37
ひとびとの想い	64
暗い春	94
草の花	123
旅立ち	153
嫁ぐということ	178
その夏	196
別れ	236
不在	257
昭和二十年 秋	288
ふたたびの出發	307

題字 裝幀

町 野田

春草 哲也

藍
より
青
く

遅い午後——小さな漁港は、ねばりづよい西日を浴びて動かない。

三十数艘の漁船は、つながれて夕照に乾き、船にくくりつけられた集魚灯は瞳を失った目のように見える。

岸壁のコンクリートで、血の色をにじませた鰯の小さな死体に、蠅が数匹、緩慢な動きでとりついている。ときおり中の一匹が、西日に耐えきれぬように発作的に激しく旋回する。そのいらついた羽音。

すると突然、漁船の一艘が身を震わす。銃声のようにエンジンの音が短く断続し、それがリズムをとりはじめるや否や、音はたちまち連鎖して、漁船という漁船が身をふるわせ、競って機関音を高らかに轟かす。

背後と南北にせまる小高い緑の山に音は鋭くぶつかり、増幅し、高揚し、船群はあたかも機関音に押し出されるように、一斉に港口を目ざしてすべり出す。

港内の海は航跡で白く湧き立ち、夕陽が、シルエットの船群のかなたで見る見る熟れ落ちていく。夜の漁への出発である。

それが天草南端、遠見浦とみがうらのシンボルであった。

昭和十八年 早春

1

「真紀！」

勝手口を入ると、座敷から父が呼んだ。

「はい」

「此処こけさん来けエ」

怒った声である。しかし、父はよく怒る。十八の娘は、もはや驚かない。

「なんばしとる！ 早けう来けエ」

「はい」

遠見浦国民学校（小学校）の校長であつた。

「坐れ！」

行義は長身で姿勢がいい。八の字髭と大声が愛嬌となり、その怒りを中和していた。

「郵便局はどきゃんか？」

「親切にしてみろとります」

行義は真紀をにらんだ。真紀は負けずに見返すことにしている。すると大抵、父が目をそらした。

「帰りは、どぎゃんか？」

「帰り？」

「遠道ばして帰りよつとだろうが」

「誰が、そぎゃん事ことば言うたっですか？」

「誰でんよかッ！」父はまたにらんだ。

勤めている郵便局から、家までは山道が近い。しかし、このひと月ほど真紀は大回りをして港を通った。

「役場の女おなも、農会の女も、帰り道は、港ば通るっちゅう噂うわさばい」

「誰でん港ば通ると気持きもちンよかけん……」

「お前は高等女学校ば出た娘だろうがッ！」

教頭の和田先生あたりのつげ口のようであった。怒られても仕方がない。港には、漁へ行く前の青年たちがたむろしていた。その中を娘たちが自転車で走ると、青年たちは、衆をたのんでからかいの声をあげるのである。もっとも真紀は例外であった。校長の娘であること、女学校を出ていること、そしてその美しさが気後れを生ませるのか、真紀が近づくと、彼らに息をのむ気配があった。

「こんにちは」

大抵、真紀の方が声をかけた。悪びれなかった。すると、慌てて青年たちは、「こんにちは」「こんにちは」と口々に殊勝な挨拶をした。その頃には、自転車の真紀は彼らに背を向けて、遠去かっ

ていた。

「男どもが、張つとる所ば、わざわざ通りよる奴がどこにおつとかッ！」

「ばってん、私は、なんも怒らるッ事はしとりません」

「口答えばするなッ！　よかか。明日から港ば通る事は禁ずる」

「……」

「よかかッ！」

「はい」

座敷を出ると、茶の間に妹の嘉恵がいた。

「いつン間に帰つとった？」

「また怒つとるね」

小声で嘉恵は言った。

「こら」と父。「こそこそ帰るな。ただいまも言えんとかッ！」

「ただいまッ」

嘉恵は大声を出し、舌を出した。

ニキロはなれた浜崎にある実科女学校へ通う十六歳である。その三人が田宮家の家族であった。六年前に母を失くしていた。

翌日、真紀は、かまわず、港を通った。

父にさからう娘ではなかったが、まれに思いもよらぬ抗いを見せた。

「こんにちは」と言い、「こんにちは」「こんにちは」と言う声を聞き、一瞬にしてすぎ去ることに、真紀は自分でもおかしなほど執着した。

山道を通るのは、寂しかった。

周一に会えぬのは、淋しかった。

村上周一が熊本師団へ入営するまで、一年足らずということが、真紀を大胆にしていたのである。港を通る真紀は、青年たちの中の周一をほとんど見ない。

しかし周一の視線を敏感に受けとめていた。視線に心ときめき、それは長く尾をひいて胸に残った。ただ、娘の大胆さは、それ以上には進まない。港へ走りながら、思いもかけず二人だけになる僥倖を期待するのだが、それはいつもはずれた。かりに二人になっても、おそらく口をきけないかもしれない。「こんにちは」と言って、一瞬にして走りすぎてしまうかもしれない。しかし、ひと月前、周一の入営まで一年足らずだと耳にしたときから、真紀は港を通ることをやめなかった。決して思い上りからではなく、周一もきつとそれを希んでいるという想いが、真紀に力をあたえていたのである。

真紀が女学校へはいったとき、同じ本渡市の中学校で周一は三年生であった。

本渡市は、遠見浦から四十数キロの距離なので、二人ともそれぞれの学校の寮へはいつていた。しかし、当時は女学校と中学校に、ほとんど交渉はなかった。教師は、いわゆる軟派行為を嚴重に

禁じだし、生徒たちも異性への羞恥心プラス仲間同士の牽制けんせいでがんじがらめになり、男女は口をきくことさえ容易ではなかった。

ただ、遠見浦から、中学校、高等女学校へはいるものは少なく、その頃、女学校へは校長の娘である真紀ひとりであり、中学校は周一と、いまは江田島の海軍兵学校へはいつている久雄の二人だけだったので、おたがい、ひそかには意識していた。

国民学校を出ると、男は船子ふねこか百姓、女は、鰯の加工場へつとめるというのが、当時の遠見浦の一般的なコースであり、網元の息子である周一と久雄は、はじめから真紀の心にはいりやすい二人であった。

しかし、口をきくことなど、ついになく、挨拶も目礼か、もしくは気がつかないふりで、すれ違う程度であった。

ただ、その頃から、真紀の心は、久雄にはあまり傾かず、周一を多く意識していた。

周一が軍事教練で、ラッパ手をつとめ、ずばぬけた音を出すことを知っていた。周一も、国民学校で父の教え子だったので、その程度のことは耳にはいった。

休暇で家にいると、夕暮れ、突撃ラッパや消灯ラッパが、下の部落から聞えてきた。

うまい、と思つて、さり気なく耳をすましましたことがある。

もう一つ。真紀が二年、周一が四年の時、中学校で大喧嘩があり、その発端が、周一と誰かの殴り合いだという噂があった。

原因は、寮の規律に関することで、どんな主張を周一がしたのかはわからない。ただ、周一が先

に手を出したというのである。上級生たちが話すのを耳にした。彼女たちは、先に手を出した周一を非難する空気であったが、真紀は、そうは思わなかった。相手が手を出すまでジッと待っている正義派なんて、いやらしい、と思った。

周一の浅黒い穏やかな容貌には、ただそれだけではなく、暴力が似合う荒々しさが、ときおりかすめることを真紀は知っていた。それが真紀は嫌ではなかった。

家に帰る乗合馬車で、周一と幾度か出会い、それだけで真紀はかなり正確に周一をとらえていた。周一が真紀の横顔に、何気なく幾度も目を走らせることも知っていた。そんなとりとめのない積み重なりが、真紀に港を通る力をあたえていたのであった。

3

そして、二月の末。

小さな出来事があった。

召集のきた英雄ひでたけの家で、出発前夜のふるまいがあり、宴が乱れはじめた頃である。

酌に坐った周一に、英雄が小声で、外へ出てくれと言うのである。言いながら立ち上って、手洗いにもいくように英雄は座敷を出た。周一もあとを追った。

英雄は、外へ出てもしまらず、浜の廃船の傍まで無言で歩いた。横幅のある小柄な身体に、小さな頭がのっていた。どちらかといえば醜男のその後姿がひどく気おっているのが、周一には妙に不安に思えた。

廢船の陰までくると、振り返らずに、「頼みがある」と英雄は言った。

「どぎゃん事ですか？」

言い出しにくいことのようにであった。

「俺にできる事なら、なんでんしますばい」

「周一」といきなり振り返って、英雄は周一の目を見た。

「はい」

「俺は、同じ船さん乗って、お前になんてん教えよったつたい」

英雄は、四歳年上で、村上家の傭う船子であった。

「ありがたか思うちよります」

周一は、そういう言い方で通していた。網元で「親方」なのは親父で、俺は船子の一人にすぎんという態度をくずさなかった。英雄は、そうした周一の態度に凶に乗ったかたちの一人であった。

「しけで海人中、二人で落ちたこともあったな」

「はい」

「ばってん、明日は戦場さん行きたい」

「俺も来年は入営です。戦地で、もしも一緒になったらよかなあと思うちよります」

「お前、ちかづきのあるとか？」

「ちかづき？」

「きまった女のあつとかちゅうこつたい」

「そぎゃんもん、おるわけなかつた」

「心ん中で思うとる女んあつとか」

「なかです」

「そうか——」

「どぎゃん事ことですか？」

「お前の人柄にらば見込んで頼むたい。恥はば忍んで頼む事ことだけん、断らんで欲しか」

「断りまッせん」

「連れ出して欲しか」

「誰だばですか？」

「中におッきたい」

「中に？」周一はいやな予感がした。

「台所に婦人会の当番で手伝いにきとる校長こうちょうとこの娘むすめたい」

「校長こうちょうところの——」

きていたのか。しかし、英雄は、うむを言わさぬ調子でたたみかけた。

「連れ出して欲しかった」

「連れ出して——」と周一はちょっとつまつて、「なんばすつとですか？」思わず非難する口調になつた。

「一度だけな——」

「一度だけ？」

「一度だけ、二人だけで会^あうてみたかったたい」

その言葉は、周一にはひどく生々^{なまなま}しく聞えた。

「おかしかね？」

「おかしゅうなんかなかです」

「すんなら頼まれてくるるか？」

断れなかった。

4

勝手口をあけると、すぐ真紀の後姿が見えた。他に二人いた。

「なんね？ 周しゃん」

ツネというの^のんだくれの漁師の女房が、顔をあげて言った。真紀の背中が固くなった。

「んにゃあ」

心を決めていたので周一はためらわなかった。真直ぐ真紀の横へいくと、「すんまッせん」と頭を下げた。真紀はびくっとして周一を振り返り、慌てて頭を下げると、みるみる赧^{はにか}くなった。

「ちょっと。すんまッせん」

周一は、もう一度それだけ言う^うと頭を下げ、誰の質問も拒んだ固い表情で、ひるまず、急がずに外へ出た。人の使いだ^だという思いが、やれないことをやらせていた。周一こそ、どれほど真紀と二